

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成20年8月18日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科

職名・学年 助教

氏名 竹内祐子

| | | | | |
|-----------------------|--|-----------|--|--|
| 事業区分 | 平成20年度・国際研究集会派遣助成 | | | |
| 研究集会名 | 国際線虫学会第5回大会 | | | |
| 発表題目 | Asymptomatic Carrier Trees in Pine Wilt Disease: from the Ecological Viewpoint | | | |
| 開催場所 | オーストラリア・ブリズベン・Convention and Exhibition Centre | | | |
| 渡航期間 | 平成20年7月12日 ~ 平成20年7月19日 | | | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有() | | | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 200,000 円 | | |
| | 使用した助成金額 | 200,000 円 | | |
| | 返納すべき助成金額 | 0 円 | | |
| | 学会参加費: 880 AUD (83,973円) | | | |
| | 渡航費用(航空費): 124,030円 | | | |
| | 以上、計208,003円に使用させていただきました | | | |
| | (端数の不足分は自費で対応いたしました)。 | | | |
| なお、上記以外の費用(宿泊料等)については | | | | |
| 校費(運営費)で対応いたしました。 | | | | |

成 果 の 概 要

竹内祐子（農学研究科・助教）

貴財団より助成いただき、去る 2008 年 7 月 13 日～18 日にオーストラリアのブリズベンで開催された第 5 回国際線虫学会議に参加して参りました。会議の概略および成果の概要について、簡単にご報告いたします。

国際線虫学会議は、オーストラリア、ヨーロッパ、アメリカ、日本など世界各地の線虫学会 14 組織から成る国際線虫学連合の主催で、6 年に一度開催されます。正式発表はありませんでしたが、名簿を拝見したところ、参加者は 1000 名以上にのぼりました。今回はオーストラリアでの開催ということもあって南半球からの参加者が特に多く、実に多国籍な、国際会議の名にふさわしい学会でした。また、研究機関や国籍だけでなく大陸をも越えた研究グループが多かったこと、質疑応答の際にもファーストネームで呼び合うようなアットホームな雰囲気であったことも印象的でした。

日本からの参加者も比較的多く、海外在住の日本人も含めて計 21 名の参加、発表がありました。日本人線虫研究者の国内での所属学会は、日本線虫学会、日本森林学会、植物病理学会、応用動物昆虫学会、樹木医学会など多岐にわたるため、国内で一堂に会することは非常に稀ですが、今回、全国の研究者と意見交換することができました。最新の研究動向について、学会発表や論文などの形では公表されていない貴重な情報を得ることもでき、大変有意義なディスカッションができました。

学会は、朝の総会に続き、口頭による研究発表セッション（計 50）が 4 つもしくは 5 つ平行して行われ、合間にロビーでポスターセッション、という構成でした。植物/動物寄生線虫から自活性線虫まで、またフィールド調査に基づく研究から分子生物学研究まで、幅広い研究紹介がなされていました。普段なじみのない分野についても、ポスターセッションで発表者に直に説明していただけたため、大変興味深く、勉強になりました。

また、学会運営についても参考になる点が多数ありました。助教という立場上、学会およびシンポジウム等で事務を担当させていただく機会が多いのですが（一昨年度 1 つ、昨年度 1 つ、今年度末 1 つ）、プログラム構成や会場設計、データ入力のシステム等、大規模な学会ならではの工夫が多くあり、今後学会運営に携わる際の参考になりました。

私自身の研究については、15 日の午前中に行われた「Forest Nematology and Pine Wilt Disease（森林線虫学とマツ材線虫病）」というセッションで、「マツ材

線虫病における潜在感染木: 生態学的視点から (Asymptomatic Carrier Trees in Pine Wilt Disease: from the Ecological Viewpoint)」というタイトルで 15 分間の口頭発表をさせていただきました。同セッションでは、他に本学の新屋良治君と、ノルウェー、ニュージーランド、韓国の研究者を合わせて計 5 題の研究発表がありました。深刻なマツ枯損被害の出ているアジアはもちろんですが、ポルトガルで本病の病原線虫であるマツノザイセンチュウが検出されたことが大きいためか、やはりヨーロッパの研究者に关心を持たれる方が多いように感じました。発表後の質疑応答でも、多方面から貴重な質問、意見をいただきました。ただ、海外の研究発表を拝見したところ（口頭・ポスターいずれにおいても）西欧・北欧を問わず今のところ検疫、防疫の観点からの研究が多いようで、発病メカニズムの核心に迫るところまでは進んでいないような印象を受けました。また、普段、論文として報告された研究を通してしか判断できない当該分野における自分の研究の位置づけや、今後望まれる方向性など、改めて肌で感じることができました。後日、別セッションでネコブセンチュウやシストセンチュウの研究発表を拝聴し、線虫学全体におけるマツ材線虫病研究を客観的に省みて、いくつか問題点も明確になりました。

今回の学会を通して、基礎研究、応用研究を含めた線虫学全般の流れとして、分子生物学の重要性が増しつつあることを再認識しました。また、特に海外で、若い世代の活性が高いような印象を受けました。線虫学は国内ではまだマイナーな分野であることもあって、なかなか他機関の研究者と交流をもつ機会がありません。国際学会に参加させていただけたことで、国内外を問わず、幅広い世代の研究者と情報交換することができ、人脈を広げる貴重な機会を得られました。研究活動を行う中で、研究機関を超えて直接意見を伺ったり、あるいは指導を仰いだりできるような密な人間関係を構築することは不可欠ですが、今回、特に海外の研究者と交流できたことは、今後の研究に大きなプラスとなるものと確信しております。6 年に一度という貴重な機会に、若輩者でありながら参加させていただくことができ、心より感謝しております。ありがとうございました。